

「開発(かいはつ)」

宅地開発やソフトウェア開発など、「開発(かいはつ)」という言葉があります。辞書を見ますと、

- ・森林や荒地などを切り開いて人間の生活に役立つようにする事。
- ・天然資源を活用して産業を興おこす事。
- ・潜せんざい在している才能などを引き出し伸ばす事。
- ・新しいものを考え出し、実用化する事。

と、記されています。現在の我々の生活は、「開発」の積み重ねでできあがったものと言えるでしょう。

しかし時に、開発という言葉は、マイナスのイメージをとまいます。

一つは、結果として自然を破壊するという一面がある事。明治以降の大規模な国土開発により、多くの自然は破壊され、公害も発生しました。また、政治的なかけひきや入札に関わる汚職などもおこりました。

さらに、先進国が途上国を開発することにより莫大な富を得るといった事例もあります。先進国の繁栄は、実際には途上国と呼ばれた新興国の国民の負担により成り立っているということでもあるのです。

この「開かいはつ発」という言葉は、もとは「開かいはつ発(かいほつ)」と読み、仏教の言葉でした。意味としては、他人をさとたにんらせること、道を求める心を開かせることといった、いわば、心の問題として使われます。

東南アジアの仏教国では、「開発僧(かいほつそう)」と呼ばれる僧侶が存在します。これは、森林の伐採や化学肥料や農薬の多用などにより農地が荒れてしまい、経済的に困窮して、都市に出稼ぎにゆくなどして子どもなど家族を犠牲にせざるを得なくなる状況から、酒や賭博とばくに逃避していくといった、物心両面での農村の荒廃に心を痛めた僧侶が、農村の開発、つまり、「開発(かいほつ)」に関わり始めたというものです。

彼らはまず、荒廃した村人の心を仏教の修行で清らかにして、自分の心の奥底を見つめるよう導き、そしてそこから、すすむべき道やなすべきことを自らで見出し、ていくということを始めました。

そして、慈悲の心を育てて村人の心を「開発」し、村人同士の助け合いにより、実際に農村の「開発」を行ってゆくというものです。

この開発僧（かいほつそう）たちが目指す「開<sup>かい</sup>発<sup>はつ</sup>」とは、物の生産を増やして所得を増加させるといった、経済的、社会的発展などの物質的な発展のみならず、人間性そのものの開発とその人間性に満ちた社会の開発、ということなのです。

本来の仏教用語の「開発（かいほつ）」は、東南アジアの仏教の国に根付いているのです。

さて、「開発（かいほつ）」の本来の意味を知る時、現在の私たちの周りにある、さまざまな「開発（かいほつ）」のことを考える良い機会となるのではありませんか？

— 終 —